

---

# 目深帽子のその奥に

黒猫さんば

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

目深帽子のその奥に

### 【Nコード】

N5291A

### 【作者名】

黒猫さんば

### 【あらすじ】

乙川姫乃16歳。バレーボールの全国大会まであと一勝と迫った時、彼女に悲劇が襲った。左膝の骨折 入院する事になった姫乃は、そこで少年と出会う。似合わない帽子をいつもかぶっている口の悪い少年だった。

## 受傷日

## プロローグ

カッっカッッ……コッコッ……

不規則な音は、病院のドコか淋しい廊下に響きます。

松葉杖の使い方がギコチナイのは、私が入院してからまだ日が浅いからです。

私は、乙川 姫乃。『姫乃』っていう名前はなかなか気に入って  
ます。

つい最近まで元気に暮らしていたのですが……

私の不注意で入院するハメになってしまいました

二日前、

『姫乃……ちょっと体調悪いんじゃない？』 友人Aこと、水谷  
真冬がいつもの“おっとりボイス”に警告の意を含ませていること  
に私は気付いていました。

しかし！！

我がバレーボール部の全国大会を賭けた一戦を控えし今、体調不  
良くらいで休むことは出来ません。

『真冬、ありがとう。でも大丈夫！私は“全国”行くまでくたばら  
ないから』

『そう？なら良いんだけど……』

真冬はまだ何か言いたげでしたが、私の決意に圧倒（？）された  
のか、心配そうな顔で見つめるだけでした。

ああ……今思えば、なんであの時真冬の忠告を聞き入れなかった  
んだろう……

女子にしては身長の高い私は、バレーボールにおいてはまさに無  
敵でした。

自分で言うのも難ですが、私の高い砲台から打ち出されるボール

は、人間のスパイクとは思えない威力で相手を弾き飛ばすのです。今回の試合でもスタメンとして起用されることになっていたので、練習にもよりいっそう力が入ります。

しかし、

真冬の言ったことも正しいのでした。

この日の私は、16年の人生で類をみない“絶不調”だったのです。

いつもの私なら、何かしら理由や言い訳をして帰っているはずでした……

『もう一本！』

私が叫ぶと、一年生がトスを上げてくれました。

タツ、タツ、タンツ！

リズムカルに助走をつけたあと、タイミングを合わせてジャンプしました。

しかし

私は上げられたボールを空振り、バランスを崩して落下しました。ただ“落ちた”のなら、笑って頭を掻いけば問題なかったでしょう。

『 姫乃！！ 』

真冬の一言は、シンプルかつ的確に私の危険を察知していました。私は、いつの間にか足下に転がっていたボールの上に着地したのです。

皆さんご存じのように、ボールは丸いのです！転がるのです！

左足を伝わって、白いバレーボールに私の全体重がかかりました。視界がサカサになったのは、それから半秒後でした。

空中で横に一回転した私は、左半身を体育館の冷たい床に叩きつけました。

『 ツー！！ 』

あまりに強く全身を打ったため呼吸が出来ず、半端なうめき声をあげてしまいました。

（あちゃあ……恥ずかしいなあ。）

私は一刻も早く立ち上がって、『ああ、痛かった』と言いながら強がりたかったのですが

起き上がろうとした私を、真冬が片手で制しました。

真冬は妙に蒼白い顔で、私の膝の前辺りを見下ろしていました。

ふと、私はその視線の先を追うとそこにはあつてはならない物があつたのです。

私の背中側に曲がるはずの左足が、なんとその爪先を顔に近付くんばかりに折れ曲がっていたのです。

『……折れてるよ。姫乃』

真冬の一言は、私にもわかっていたことでしたが、あまりに突然の出来事に私の思考回路はオーバーヒート、オーバーラップ、オーバーザレインボーなのでした。

……足？……折れた？……嘘だよね？……全国は？……私のせいだ……

私の周りには練習中の悲劇に気付いた部員たちが、輪を作っていました。

受け入れられない現実、夢のなかでは感じることの出来ないものによって突きつけられました。

『痛ッ！！』

左足に今まで味わったことのない痛みが走りました。

チクチクやズキズキといった擬音では表現出来ない痛み、私の視界が白くボヤけ

私は気を失いました。

目が覚めたのは、薬品の香る病院の一室でした。

既に処置はされていて、あの時に感じた痛みはもうありませんでした。

ベッドの上でブーツとしていると、不意にドアがノックされました。

た。

『……どうぞ』

入ってきたのは母親と体格の良い医者でした。

『気分はどうだい？』

大きな体に不釣り合いな高い声は、無邪気で人なつつこい印象を受けました。

『……良いです』

嘘です。最悪です。

しかし

最悪なのは心の方であつて、身体的には足が固定されているという以外、なんの不具合もありませんでした。

『そうかあ、じゃあまだ手術は出来ないね。僕は君の執刀医の河本です。よろしく』

『よ、宜しく願います』

さっきの会話ドコがおかしくなかったかな？

元気なのに手術が出来ない？やはりおかしいです。

私の不思議そうな顔に気付いたのか、河本先生が口を開きました。  
『姫乃さん、実は“水ぼうそう”に感染しているようです。気付かないまま全身麻酔をかけると、気道にできたブツブツのせいで呼吸困難になる場合があるんだ』

河本先生が言うには、私の膝は関節の中の骨が砕け、飛び散っているそうです。

すぐにでも手術をしたいそうですが。

私の体調が良いということは、まだ“水ぼうそう”が本気を出していない（先生は別の言葉を使っていたけど……）からなんだそうです。

先生は困ったように笑っていましたが、

お大事に。と言い置いて、トボトボ出ていきました。

これが私の入院生活の始まりだったのです。



## 受傷後3日目

## 目深帽子との出会い

左足に重いギプスを付けたまま、右足と妙な杖で歩くのは、なかなか困難です。

エレベーターまでの道のりを、ヨイシヨヨイシヨと歩いていきます。

私の病室は、“水ぼうそう”の感染を警戒して、個室だったのですが……

横長な形のこの病院は、西の端に『個室』、東の端に『エレベーター』という構図になっていたのです。

足を怪我した私には、あまりにもヒドイ仕打ちなのでした……長い道のりを踏破した私は、丁度よく止まっていたエレベーターに乗り込みました。

先に乗っていた看護婦さんの 何階ですか？ の問いに、荒い息を抑え 二階です と答えました。

私がここまで必死に二階を目指す理由は、ただ一つ 暇潰しです。

病院というのは不思議なもので、何をしても、ベッドの上にいるだけで時の流れが遅くなるのです。

私はもともと、ジツとしているのが苦手なのでとてもイライラしていました。

そんな私の気持ちを察してか、河本先生が松葉杖を貸してくれました。 昨日、その杖にすがりついて歩いた結果 ロビーで外来患者を観察することが一番楽しいと判明しました。

不謹慎な暇潰しに思われますが、これがなかなか楽しいのです。

エレベーターが機械的な女性の声で、『2カイデス』と告げました。

看護婦さんの笑顔に軽く会釈を返すと、ロビーへと歩を進めました。



た。

平日だというのにロビーには人がうじゃうじゃいました。  
ここの病院は県内でもなかなか有名で、なにより“大きい”ので  
す。

入院三日目の新米患者が歩き回ると、たちまち迷ってしまうほど、  
危険な広さなのです。

ちなみに、その新米患者とは私のことです……

私は昨日来たときと同じ、入り口に一番近い長椅子に座りました。  
人の流れがせわしなく行き来するたび、自動ドアから五月のうら  
らかな風が吹き込んできます。

私は、普段読みもしないファッション誌を手にとると、その陰か  
ら人間観察を始めました。

皮膚科の受付にいるオバサン……眼鏡のセンス悪いなあ。メ  
ガネザルに選んでもらった方がまだキュートだよ

売店にいるオジサン……なんでネクタイをYシャツの中に入れ  
ているの？自分を貫くのも良いことかもしれないけど、たまには周  
りの目にも気を配った方が良いかもよ？

真に失礼な感想が次々に沸いてくるのだから、私はつくづく自分  
の性格が嫌になります。

しかし、

それを大いに楽しんでいる自分がいることも、また事実だったの  
でした……

長靴にジャージを入れたお兄さんをひとしきり罵倒しきった時  
入り口を挟んだ反対側に、クスクス笑いが見えました。

黒い野球帽を目深にかぶって笑っている目は、確実に私に向けら  
れているのです。

私はなんだか腹立たしくなつて、松葉杖をひッ掴むと目深帽子の前に歩み寄つたのです。

『な、何笑つてんのよ』

目深帽子はまだクスクス笑いを止めませんでした。

しかし、私の足を見ると、少しビツクリしてからポンポンと自分の隣を叩きました。

私はまだクスクス笑いが収にさわっていましたが、意外と素直に腰を下ろしました。

『で、なんで笑つてんのよ？』 『君、気付いてないのか？』

『気付くつて。何に？』

私がキョトンとした表情でそう聞くと、目深帽子は私の頭のとっぺんを指さしました。

もちろんクスクス笑いながら

『寝癖。可愛いよ』

彼はそう言つたあと、ついに声をあげて笑いだしました。

私はというと、すぐさまロビーの壁に据えつけられた全身鏡で髪の毛の行方を確認しました。

私の黒髪のとっぺんには、二本の毛束が左右にピコッピコッと跳ねていたのです。

さながらそれは、某猫型ロボットの未来アイテム“頭頂部装着式回転翼”に酷似していました。

『君、面白いよ』

視線を彼に戻すと、大きいまんまるな目がこちらをのぞいていました。

頬が熱くなつた気がします、これは寝癖をからかわれた“怒り”からではないようでした。

私が黙つてつつ立っていると、と、まんまる目玉はさっきのようにポンポンと椅子を叩きました。

『君、入院？』

私がいかにも渋々座る様子を見終えたあと、彼が訊いてきました。

『まあね。アンタは……お見舞い？』

『まあ、そんなとこかな』

彼の来ている服は、上から野球帽、ジャケット、パーカー、余裕のあるジーンパンでした。

普通、入院患者はパジャマ以外の衣服を許されません。良くてジヤージでしょう。

彼の格好は“外来患者”もしくは“見舞い”以外考えられませんでした。

『しかしなあ、入院中でもみだしなみ位は気い使えよな』

『う、うるさいわねえ！余計なお世話でしょ！』

言いつつも、私はさつき手櫛した辺りをまた撫でつけていました。私は妙に悔しくなってきた、奴の弱点を探すことにしました。

もともと私は、人の欠点を探すことにだけには長けていました。

こいつの弱点もすぐ見つけてやるつもりです。

“姫乃EYES”始動！

（注：“姫乃EYES”とは、人間観察をしている私の姿を見た真冬が、

『姫乃……目の色がオカシイよ……』と恐れた事から名前がつけられた“神器”の一つです）

顔立ちは、まあ中の上って位？ 大きな目にかかりそうな黒髪

は、ほどよい長さで保たれている。すごく細身だけど、必要な分

の筋肉はかね備えている。衣服もとても似合っていて、正直な話

カッコイイ……

ここまでだと私の敗北は目に見えているように聞こえるでしょう。しかし！

私は見つけたのです、彼のウィークポイントを。

それは

『アンタこそ、なんでそんな似合わない帽子かぶってんのよ』 彼

はいきなり迎え撃ってきた私の反撃に、予想以上の反応を見せました。

『え！？そ……そんなことどうでも良いだろ！！』

『よくないね。私の寝癖さんざんいじつといて、文句言わせないわよ！』

『お。そろそろ面会時間だ！じゃなっ……』

『あ、ズルイ！逃げるなあ！』

彼は帽子をよりいっそう深くかぶると、私に追い付かれまいと速足で逃げていきました。

これが、彼との最初の出会いなのです

## 受傷後4日目

## ブツブツの襲撃（前書き）

前書きの書き方がわからず、三話でやっと思書けました；；  
はじめまして。黒猫さんばと申します。

この小説が初の投稿作品になります。

未熟なところだらけかもしれませんが、ご愛読いただけたら嬉し  
いかぎりです。

## 受傷後4日目

## ブツブツの襲撃

それは突然私に襲いかかってきました……

『その歳になって“水ぼうそう”かよ』

目深帽子が笑っている。なんだか、こいつに笑われると腹が立ちます！

しかし……

こいつの言う通り、“水ぼうそう”が発症したのでした

今朝、

私は院内の騒がしい音で目が覚めました。

昨日は目深帽子との一件のせいで、なかなか寝つけませんでした。奴に対する“怒り”やら“憎しみ”やら“悔しさ”が溢れてくるのでした。

しかし、

何故か彼が気になるのも、事実……かな？

私は腕を組むため、右手左手双方を互いの上に乘せました。

すると、妙な感触！

いつものスベスベ肌は何処へやら、両腕の表面に赤い発疹がいくつも

『なんじゃこりゃあああああ~~~~!!』

河本先生の診断はもちろん“水ぼうそう”でした。

熱とかも出るそうですが、言われてみれば確かに熱っぽいかもしれない、しかし、

ブツブツと微熱以外の症状はなかったので、昨日と同じくロビーへ向かいました。

松葉杖の扱いにも慣れてきたのか、思いのほか早く二階ロビーまでたどり着けました。

私がここに来た理由は、先日とは違います

今回の訪問の理由はリベンジ！

ロビーは、あの帽子男との報復戦を挑める唯一の場所なのですから！

なにせ、私は彼の名前を知りません。それどころか、年齢・住んでるトコ・誰の見舞いか・座右の銘etc……何一つ知らないのです。

つまり！

彼に再会するためには、ここで張り込むのがベターだと考えたのです。

アイツを見つけるのに何日かかるかな？ という心配は、私の杞憂に終わりました。

（ いた！ ）

忘れもしないあの帽子。

昨日と全く違う服装にも関わらず、野球帽は昨日と同じようにスッポリと彼の頭を覆っていました。

目深帽子は本を読んでいた。昨日私が座っていた長椅子で……その姿からは妙な大人っぽさが滲んでいるようでした。いや、実際滲んでたのかも

私は彼から発生している“近付きがたいオーラ”を松葉杖で払い除け、ずんつと歩みでした。

『やあ、寝癖女』

彼は顔を上げると、私を認識し、そして挨拶ならぬ挨拶をしまし

た。

私はムツとしましたが、こちらにも“武器”があることを思いだし攻勢に出ます。

『やあ、目深帽子君』

彼はニヤニヤしていた顔を、急にドキツとさせました。

（やっぱり気にしてんだ。ダメージ大かな？）

私はなんだか満足したので、彼の隣に自分から座りました。

『来ると思った』

『え なにが？』

急に喋りだした帽子は、そのなかのまんまる目玉をこちらに向けています。

私は先程の余韻に浸っていたせいで不意を突かれ、マヌケな声色を出してしまいました。

『人の話はしっかり聞きたまえ。なにがって、オマエに決まってえうえええ！ど、どどうしたんだその腕！？』

彼が大声を出したので、自然と視線が私たちに集まります。

彼の驚き方は、もう尋常じゃありませんでした。

壊れたクルミ割り人形のように口をパクパクさせています。

あまりに愉快だったので、そのまま保存したかった位です。

『いや、ただの“水ぼうそう”だから……』

『へ？』

半開きの口を直してやろうと、事実を説明したのがいけませんでした。

しかし、

気付いたときには後の祭り……彼は笑いだしていました。そして、

あの言葉

『その歳になって“水ぼうそう”かよ』

しかし、

私は妙な感覚に包まれていました。

確かに、彼への“怒り”は感じているのですが、ドコか引っ掛か



るところがあるのです。

なんだろう……

『なあ、お前の病室何処だ？』

私がボオ〜っとしていると、彼が尋ねてきました。当然、ひとしきり笑ったあと……

『五階の一番奥の部屋だけど……なんで？』

『いやな、オマエ足怪我してるから、わざわざロビーまで来るの大変じゃないかと思って』

『思ってた？』

私は更に続きがあるような気がして、いや、続きを期待して訊き返しました。

『えつとだな、オマエが大変だと思って……み、見舞い。そう、見舞いに行つてやろうと思ったんだ』

うつ向きかげんの目深帽子の下から、そんな言葉が聞こえてきました。

『わ、私は。別にアンタに会いにここに来たんじゃないわよ……』

彼の言葉に喜んでる自分がいる、だけど、彼にはなんだか悟られたくありませんでした。

私の返答を聞いた彼は、なんだかシュン……っとしていました。もちろん、この返答には続きがあります

『アンタがどうしてもって言うなら。お見舞いされても良いわよ』

『……お見舞いされてもってなんだよ』

彼は的確なツツコミをしつつも、ニヤニヤ笑っていました。たぶん私も笑っていたと思います……

彼はチラッと時計を確認しました。

『！ヤバっ！！もう行かなきゃ！じゃな、またあし……明後日』  
『うん。じゃあ』

私は彼に手を振っていました。

受傷後5日目

一人悶々……（前書き）

更新が遅くなつてしまいすみません……  
黒猫さんばです。

なんだか、スポ根ですが良かったら読んでくださいw

それと、読んでいただけたら是非、足跡を残してもらえるとありがたいです。

批評なども宜しく願います。

## 受傷後5日目

一人悶々……

今日はバレーボール部の試合があります。

全国大会への切符を賭けた大事な試合です。

出場はもちろん、応援にすら行けない私は、ベッドの中でひたすら祈るしかありません。

チームの中枢を担っていた私が抜けた今、勝てる見込みはファイフティファイフティか……自惚れ屋でスイマセン……

とにかく、私にはみんなの勝利を願って“待つ”ことしかできないのです。

それにしても、目深帽子はなんで今日ではなく明日来ると言い残したのか……何か大事な用事でもあったのか……

ああ……イケナイイケナイ。真冬たちの勝利を祈るはずが、なんでアイツの話になるんだ……

アイツが気になるから？ いや、それはない！ 無い！ 絶対無い！ うん。

でも……

『なにがって、オマエに決まって』

アレは嬉しかった……かな？

乙川 姫乃16歳。青春真っ只中。一人悶々とするのであった！

両チーム2セットごと取り、ゲームはこの最終セットに託されました。

私、水谷 真冬は今、そのコートの中に立っています。

第5セットは先に15点先取したチームの勝利になります。

私達県立O高校は、私立K女子高に13対14と大ピンチです！ 次のボールが私達の陣営に落ちた瞬間、敗北……全国への道が閉

ざされます。相手チームのサーブ、ボールは低い弾道を保ちネットをかすめながら向かってきました。

落下点は無人。まさに神業的サーブでした。

（落ちないでえー!!）

私の祈りを嘲笑うかのように、ボールは地面に接近していきます。しかし！

その時、ボールは高く跳ね上がりました。

ボールをすくいあげたのは一年生のルーキーでした。

練習のとき、とても苦手だと言っていたレシーブを……しかもこの土壇場で……

彼女の目は、まだ闘う目でした。

私は彼女の、みんなの繋げてくれた思いをネット前に上げました。身長の高い私には、得点を狙うことはとても難しいです。

しかし、

トスを上げて、みんなをサポートすることは出来ます！

私が上げたボールは、姫乃の代わりに入った先輩によって敵陣地を撃ち滅ぼしました。

14対14。ここからは先に二点取った方が勝利です。

私は負けるわけにはいきませんでした。

いえ、私は負けても良かったのです……

だけど、

姫乃のために負けるわけにはいかない

人一倍練習して、嫌なことも進んでやって、あんなに頑張っていた姫乃の努力に報いるため、私は負けるわけにはいきませんでした。こちらのサーブです。弧を描いたボールは敵地に向かっていきます。

しかし、

相手チームの一人がそれを軽々とネット前に上げると  
ダンッ……!!

速攻です。

ボールは無情にも私達の陣営に大きな音を立てて跳ね回りました。もう、後がありません。

周りの歓声がとても小さく聞こえます。聞こえる……いや、感じるのは私の心臓の音と息遣い……

私はある歌を思い出していました。

どんな人でも、人生に一度はスポットライトを浴びる日がくるんだ

ホントでした。地味で地味で地味な私だけど、こんなに鼓動の高ぶる舞台に立っているんです。

最後まで諦めない！

相手チームのサーブです。緊張しているのか、深呼吸を繰り返しています。

最後に大きく息を吸い、彼女はボールを投げ上げました。

私たちが身構えると同時、彼女の右手がボールを打ちました。

ボールはかなりの速さでネットを越えてきました。

あの状況下であれだけのサーブを打てるなんて……すごい精神力です。

スピードを威力に変換したボールは、先程のルーキーを狙いました。た。

ルーキーはなんとかボールに触れました。

しかし、

ボールは絶望の淵……コート外へと弾かれました。

その時、誰もが思ったでしょう

（ああ、終わったな。）

と。

しかし！

私は違いました！

負けるわけにはいかないのです！

私は飛込みました。

コート外へと落下していくボールに……

（間に合えええ！！）

私の右手。迫る地面。

三十センチ。二十センチ。十センチ。

どんな人でも、人生に一度はスポットライトを浴びる日がくるんだ

最後まで諦めない！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5291a/>

---

目深帽子のその奥に

2010年10月10日00時01分発行